

長崎方言資料としての『ドゥーフ・ハルマ』初稿本 — A項目を中心に —

前田 桂子

はじめに

長崎出島の和蘭商館長のヘンドリック・ドゥーフが1817年に日本人和蘭通詞11人と協力して編纂した日蘭対訳辞書『ドゥーフ・ハルマ』^{注1}の自筆本^{注2}とされる資料がある。『ドゥーフ・ハルマ』は写本の形で幕末のオランダ語学習者の間で使用された辞書として有名であるが、本書は、そのオリジナルの本ということになる。1984年に松田清氏が高知県立高知追手前高校の書庫で発見された^{注3}（以下、初稿と呼ぶ）画像を入手したところ、透かし入りの西洋紙に筆記体で手書きされ左側にオランダ語、右側にオランダ式ローマ字綴りの日本語が記されている（図1参照）。

『ドゥーフ・ハルマ』の日本語に関してはいくつかの先行研究があるが、いずれも3稿その他を資料としており、初稿中の日本語については手つかずの状態である。その理由はローマ字の手書き資料の解読作業が進んでいないためだと思われるが、A項目には発見者の松田氏による翻刻がある。

そこで本研究では、A項目全99ページの画像と翻刻を照らしながら、近世長崎方言と思われる語を抜き出し、方言資料としての可能性を検討したい。その際、初稿とその改訂版である3稿『道訳法児馬』（図2参照）^{注4}を比較する。

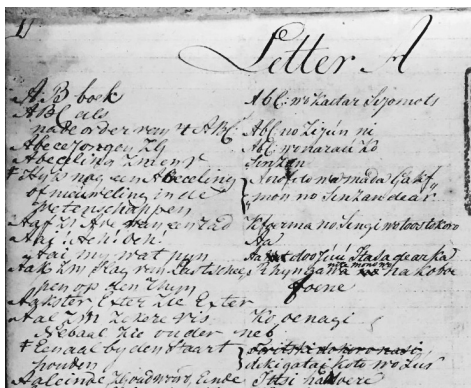


図1 初稿『ドゥーフ・ハルマ』 高知追手前高校蔵・陳力衛氏撮影

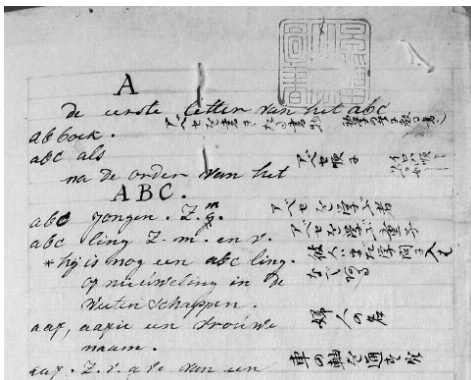


図2 3稿『道訳法児馬』 早稲田大学蔵

1 ドゥーフ・ハルマ辞書の成立事情

ヘンドリック・ドゥーフ (1777-1835) は、長崎出島に18年間 (1799-1817) 滞在して和蘭商館長 (1803-1817) を務めた人物である。当時日本人との意思の疎通は、日本人和蘭通詞のオランダ語によるものであったが、ドゥーフは、通詞の言葉の未熟なことに問題を感じていた。また日本語とオランダ語の対訳辞書にも十分なものがなかったため、和蘭通詞数人と協力して、フランソワ・ハルマ『蘭仏辞書』のフランス語部分に日本語を当てるという方法で辞書編纂を始めた。当初は私的な物であったが、1816年に事情を知った幕府の献上命令に応じてその後、改稿された (2稿, 3稿)。印刷刊行は許されなかったため写本として流布したが、この辞書が貴重なものであったことは、適塾のゾーフ部屋のエピソードなどでも知られる^{注5}。その後『和蘭辞彙』の名で刊行されたのは1855年のことである。以下の『ゾーフ日本回想録』^{注6} から最初に辞書編纂を始めた動機が窺える。

- ・新来の役人の言語は、聴馴れざるため頗る会得に苦しみ、又彼等の発音並に言語は、日本流の句調に訛れるを以て、新来者には甚だ難解なりき。
- ・倦まず日本語を学修せし後、1812年に至りて最も優秀なる通詞を選抜して之を補助となし、ハルマ (Halma) の蘭佛辞書に準拠して、和蘭人の為に日本語字書を作ることに着手せり。

また、編纂方針については『ドゥーフ・ハルマ』3稿の凡例の記述に、次のように述べる。なお下線は稿者による。

外臣へんてれきどうふ此五六年前に思ひを起こし通詞家数輩と相議して和蘭の字書を皇和の語にて訳して一部卒業せし 唯は通詞家をして其家学に進ましめんと欲するのみなり 外臣に先たつて此こときの業をなせし人あるを聞す

この記述から、長崎出島に勤務する和蘭通詞数人と相談して蘭日辞書を作ったこと、「唯は通詞家をして其学に進ましめんと欲するのみなり」と、日本人通訳の上達を目指したことが分かる。さらに次の記述からは、辞書の作成を知った幕府が献上するよう命令を下し、ドゥーフは和蘭通詞11人と共に幕府用の辞書の編纂に当たった様子が記されている。

- 一 今恭く是謄写して奉れとの命下たれり
- 一 今通詞十一人に命じて此書謄写の事に従はしめらる此書初めに撰みし仮にて許多の謬誤ありて捧げかたく凡そ大部の書は固より免れざる所なり是に於て今更に校正す
- 一 此訳書はもとフランソワスハルマの著述する辞書の二版の本に就て撰すといへとも全くハルマを用ふるにあらず その運用の例に於て不用なるものは此を捨、緊用なるものは更に増して加ふ (『道訳法児馬』緒言 早稲田大学図書館蔵)

また、凡例には、

- ・此辞書を訳するは勉めて語の本意に随て鄙俗なるをいとはす然と雖とも本語の訳及び其運用の中には猶解し難き類もあるべし
- ・此書の訳語は直に長崎の方言を取る
- ・我輩皆無学にして雅言を以て訳詞を下す事能はす若し強て雅言を用ん事を欲せば却て

蘭語の義理を失ん事を恐る故に他の笑ひを顧みず直に鄙俚の俗語方言を以て訳す

(『道譯法児馬』『凡例』早稲田大学蔵本)

といった記述が並び、無理に雅言で訳そうとすれば意味が正確に伝わらない怖れのあることから、関係する日本人と蘭通詞が日常使う、俗語や長崎方言で訳する方針をとったことが分かる。

2 初稿について

松田清氏が1984年に初稿を発見したとき、全14巻中第5巻（G）、第8巻（O）、12巻（V）が欠本していたが、その後、第8巻（O）（388ページ）が見つかったようで、現在は12冊が存する。縦27.5cm×横21cmの厚手の透かし入り高級用紙が使用され、両面表記の辞書の本文は、全1,302ページにのぼる。オランダ語とローマ字日本語がペンで記されており、収録語数は50,000語程度と考えられる。松田氏は用紙や鉛筆罫線、筆跡の特徴から推して、江戸時代の出島で書かれた、長崎オランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフの自筆と判断した^{注7}。

また、松田（1991）では『ドゥーフ・ハルマ』の諸本についても考察し、系統図を示された。図3の通り、初稿は1729年成立のF.ハルマ『蘭仏辞典』第2版を元に作られたもので、大英博物館所蔵のシーボルト将来本やライデン大学所蔵のプロンホフ本のA項目は初稿から直接写したものであるらしい。鈴木博（1977）で紹介されたライデン本には、『ドゥーフ・ハルマ』のうち、初稿とだけ共通する記述も見られるという。

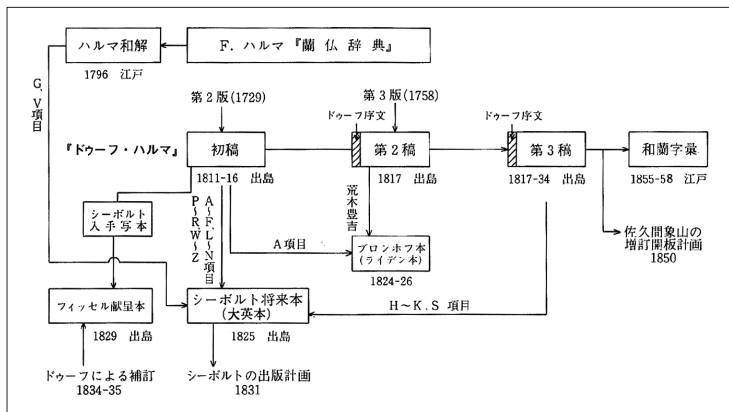


図3 『ドゥーフ・ハルマ』系統図

松田清（1991）『絵から言葉へ』より

3 初稿の長崎方言

『ドゥーフ・ハルマ』は凡例に述べるように、「鄙俚の俗語方言を以て訳す」ことを方針とした。しかし、幕府献上本では、ありのままの長崎方言を使用したとは考えにくい。ドゥーフが

辞書編纂を思いついた動機が通訳の意思疎通をスムーズにしたいとの思いからであったことを考えると、私的に作成した初稿は和蘭通詞の普段使う長崎ことばが色濃く反映されていることが予想される。それに対して、幕府献上本では江戸を意識した言葉に直している可能性が高いと思われる。この2書間の異同を比較すれば、ドゥーフ及び和蘭通詞の方言観が窺えるのではないか。残念ながら2稿は現存しないので、本稿では和蘭通詞が更に改訂を加えた3稿を使って、初稿との差異の大きな語をA項目から取り上げ、表現の異同を観察する^{注8}。

3-1 初稿の日本語表記法

先に見たように初稿は全体がアルファベット表記である。オランダ語はもちろん日本語部分もオランダ式ローマ字で書かれるが、例えば、スを表す表記に soe, su, s があるように複数のパターンが見られる場合がある。以下に、A 項目の中で使用されている表記を五十音図にまとめた(表1)。A 項目の99ページという分量では出現しない音もあったので、表記のルールから類推した綴りを()に入れて補った。表には示していないが、長音は同じ母音を二つ重ねて「総世界(soo sekai)」、「言うた(juuta)」といった表記法を取る。また、同じ長音でもウ段の拗長音の場合には「子音 + ioe」という表記が見られた。

表1 初稿の日本語ローマ字表記一覧

() 内は推定

	あ	か	が	さ	ざ	た	だ	な
a	a	ka	ga	sa	za	ta	da	na
i	i	ki	gi	si	zi	tsi	—	ni
u	u, oe	kfoe, kf	gfoe, gf	soe, su, s	zoe	tsoe, ts	dsoe	noe
e	e, je	ke	ge	se	ze	te	de	ne
o	o	ko	go	so	zo	to	do	no
-ya	—	kija	(gija)	sija	zija	tsija	—	(nija)
-yu	—	(kiju)	(giju)	siju	ziju	(tsiju)	—	(niju)
-yu:	—	kioe	(gioe)	siue	zioe	tsioe	—	—
-yo	—	kijo	gijo	sijo	zijo	tsijo	—	nijo
合拗音	—	qua (kfoewa)	gua gfoewa	—	—	—	—	—

	は	ば	ぱ	ま	や	ら	わ	ん
a	Ha	ba	pa	ma	ja	ra	wa	n, m
i	fi	bi	(pi)	mi	—	ri	—	—
u	foe, f	boe, b	(poe)	moe, m	joe, ju	roe, ru, r	—	—
e	fe, he	be	(pe)	me	jhe	re	—	—
o	fo	bo	po	mo	jo	ro	wo	—
-ya	fija	(bija)	(pija)	mija	—	(rija)	—	—
-yu	(hiju)	(biju)	(piju)	(miju)	—	(riju)	—	—
-yu:	(fioe)	(bioe)	(pioe)	(mioe)	—	(rioie)	—	—
-yo	hijo	bijo	(pijo)	mijo	—	rijo	—	—

3-2 表記からわかる長崎方言の音訛

前項で見たように一つの音韻に複数の表記法が存在することがある。これらの用法から、実際の音訛を忠実に捉えようとしたのではないと思われる事象があったので、以下に示す。その際、本書の引用であるローマ字表記の後に私に漢字仮名表記を付し、適宜下線を施した。なお対象の音韻はカタカナ表記で示す。まず、動詞の語末母音の脱落を表したと思われる例を示す。

○ 語末母音の脱落

Fitots ni kfoebiritsoekfoer ひとツにくびりつくル (7/51)

Nesi Kir ねし切ル (80/1) Juri otos 揺り落とス (71/23)

Sin koto ga anofito ni tsoegesiraseta 死ンことがあの人に告げ知らせた (p.19 1.24)

このように子音で終わる表記がある一方で、同じル、スでも、「oroer 下るる」(70/45)や「Soezatta すざった」(52/17)のように、母音が表記された例もある。A 項目以外の語も調査してみないと確実なことはいえないが、母音表記がない語は語末に集中しているような印象があった。語末の母音脱落は長崎方言の音韻的特徴の一つであることから、これらは当時の方言の音訛の可能性がある。そのほかに合拗音、母音の交替、拗音化、清濁の交替現象など、いずれも長崎地方における方言的な現象が見られた。以下、列挙する。

○ 合拗音

Jer tameni gfoewan Kakfoer 得るために願(グワン)かくる (p.46 1.35)

Sijoguats wa hajakf kfoe oe de aroo 正月(グワツ)は早く来うであろう (p.27 1.15)

○ e → i 母音の交替

Watafoesi wa Jaats mai ni Jadomoto ni Kairoo わたくしは八つ前に宿元に帰(かイ)ろ
う (p.40 1.8)

○ 拗音化

Itsizijuroesiki 著(いちジュる)しき (p.22 1.35)

○ 動詞の清濁の交代の例

Sono ita wa amari misikakf fiki kitta その板はあまり短(みシ)かく引き切った (p.80 1.29)

Nesi Kir ねシ切る (p.80 1.1)

Sono Seisats wa fiki Saida その制札は引き裂いダ (p.70 1.20)

3-3 初稿の長崎方言語彙

本項では、近世の長崎方言と考えられる語彙を取り上げ、同時代の諸文献と比較して検証する。語彙の採集にあたり、A 項目から方言や俗語と考えられる語を選んで『ドーフ・ハルマ』の3稿である『道訳法児馬』と比較した。先に見たように3稿は幕府献上本である。それが関係したのか、初稿の長崎方言がかなり中央語に書き換えられていた。書き換えられる前の形は、方言・俗語の可能性が高いと考え、そのようにして選んだ語を4つに分類し、3-3-1から3-3-4に示した。

3-3-1 日葡辞書および近世方言書に記載のある長崎方言語彙

以下、初稿の用例を列挙するが、枠の左から順に通番と語および所在を示すページ数、オランダ語、ローマ字日本語、稿者による漢字仮名表記と3稿『道訳法児馬』の日本語を記載した。枠外の記述は下表記(X.)や俗語を示す「～にまさる」という注記のある『日葡辞書』の例と、近世の長崎方言を載せた方言書の用例である。それぞれの語の意味は3稿および『日葡辞書』などの記述を参照されたい。

通番, 語 頁 / 行	オランダ語	ローマ字日本語	漢字仮名 (稿者による)	3 稿 『道訳法児馬』
1 あやす 71/13	Afschrobben ww met water afboenen	Mizoe wo tsoeke te Soora nado de ajas	水をつけてそうら などであやす	箒に水付て摺り洗 ふ

Ayaxi,su. アヤシ, ス(零し, す) こぼし落す ㊦ Chiwo ayasu.(血を零す)血をしたたらす。

㊦ また、下(X.)では、果物などを地面へはたき落とす意。 (1603『日葡辞書』)

木の実を落とす あやす 柿をあやす 栗をあやすなど云 (1830頃『筑紫方言』)

2 おおはと 58/16	Afgieren Gw:Een zeew: t schip gierde van het groote hoofd af	foenega Oohato Jori hanare nawotta	船が 大波止 より離 れなおった	船が 大波戸 より風 波にて横流れした
-----------------	-----------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------	----------------------------	-------------------------------

Fato. ハト(波止) 波止場, あるいは下船するのに適した場所. 下(X.)の語.

(1603『日葡辞書』)

3 くびる 7/51	Aaneen binden ww t'zamen binden	Fitots ni kfoebiritsoekfoer	ひとつにく びり つ くる	撚り 合する 又 綴り 合する
---------------	------------------------------------	---------------------------------------	-------------------------	----------------------------------

Cubiri,ru,itta. クビリ, ル, ッタ(縊り, る, った)結びつける, または, しばる. ㊦ また, 縊
死する. 例, Cubiuo cubiru(頸を縊る) 下(X.)の語. (1603『日葡辞書』)

4 こぎる 48/32	Afdingen ww	Kogir , Negir	こぎる, 値切る	直切る
----------------	-------------	----------------------	----------	------------

Coguiiri,u,itta. コギリ, ル, ッタ(こぎり, る, った)値段を値切る. Neguiiri,ru(値切り, る)
と言う方がまさる. (1603『日葡辞書』)

一 ねぎる事を こぎる (1830頃『筑紫方言』)

5 しっぽく 25/45	Aanregten, opdijschen	Sijokfmots wo Sippokf ni Kazari tsoekfoer	食物を 卓袱 に飾り 付くる	卓子 に供る
-----------------	--------------------------	--------------------------------------------------------	--------------------------	---------------

同 バンカン

一 卓子 杯ノコト

シツホク

(1790『南詞雑解』)

6	しゃんす 3/47	Hy is de aanbieder van Zyn minnares	Anofito wa Ziboen no Sijans wo oejamau fito de ar	あの人は自分の しゃんすを敬う人 である	彼は己が恋女を最も慕ふ人である
---	--------------	----------------------------------------	----------------------------------------------------------------	----------------------------	-----------------

○ 女色の事を… 長崎にて ○ しゃんすといふ 想思を唐音に唱るが (1775 『物類称呼』)
 シキジャウ シキジャウ 色情を ○ 想思 唐音 (1788 『西遊旅譚』)
 一 密通スル女ヲ シヤンス (1814 『瓊浦通』)

7	すばん 84/17	Albedryf Zg Albeschik	Soeban Sur fito	すばんする人	何も彼も請込てする人
---	--------------	--------------------------	------------------------	--------	------------

一 いらぬせはを すばん (1841 『壺蘆圃雜記』 長崎の方言)

8	せく 72/37	Afsluiten ww met een	Zijoo de Sekf	錠でせく	錠をおろしておる
---	-------------	-------------------------	----------------------	------	----------

Xeqi,u,eita. セキ,ク,イタ(塞・堰き,く,いた)禁ずる, または遮り止める. 例, Michiuo
 xequ(道を塞ぐ) 道路をふさぐ(中略) ¶ Tōou xequ.(戸をせく)戸を閉じる. 下(X.)
 の語. (後略) (1603 『日葡辞書』)

9	そうら 52/3	Afgeboend dw afboenen	Soora Kaketa	そうらかけた	そふらにて摺り洗ひ落とされたる
---	-------------	--------------------------	---------------------	--------	-----------------

Sauara. サワラ(さわら) 割り竹を束ねて作ったたわしで, 物をこすり擦るのに用いる
 もの. ¶ Nauazauara(縄ざわら)縄で作ったたわし. (1603 『日葡辞書』)
 一 たわしを そうら (1841 『壺蘆圃雜記』)
 たわし さはら 又さうらとも (1830頃 『筑紫方言』)

10	そびく 72/22	Afsleepen ww van boven sleepen	Sobiki otos	そびき落とす	上より引き落とす
----	--------------	-----------------------------------	--------------------	--------	----------

Sobiqi,u,ita. ソビキ,ク,イタ(そびき,く,いた)無理に引っ張る. 例, Xoninno
 saisidomouo sagaxi idaxite fiqi sobiqu.(諸人の妻子どもを捜し出して引きそびく)C.
 N. 巻五. 皆の妻や子をさがし求め, 見つけ出して無理やりに連れて行った.

(1603 『日葡辞書』)

長崎にては冬引事をソヒクといふ

(1843頃 『俚言集覧』)

11	はわく 52/6	Afgeborsteld dw afborstelen	Keharai nite Hawaita	毛払いにはわいた	毛払ひにて携り落とされたる
----	-------------	--------------------------------	--------------------------------	----------	---------------

Fauaqi,u,aita. ハワキ,ク,イタ(はわき,く,いた) 箒で掃く. (1603 『日葡辞書』)
 はく 掃 ははく (1830頃 『筑紫方言』)

12	ひたつ 90/19	ten tweeden	fitatsoe ni wa	ひたつには	復た一つには
----	--------------	-------------	-----------------------	-------	--------

二つ 長崎にて ひたつ

越後の方言のこたく ひふのたかひ少からす (1830頃 『筑紫方言』)

13 ひらくち 97/40	Aspis slang, zekere klyne venynige Slang	Ooi ni dokf no ar firakfoetsi	大いの毒のあるひ らくち	毒蛇の名
------------------	------------------------------------------------	-----------------------------------------	-----------------	------

Firacuchi. ヒラクチ(平口) 虻. 上(Cami)では, cuchifami(虻)と言う.

(1603『日葡辞書』)

14 ふせ 11/17	Aangelapt dw aanlappen	foesesita , Sojeta	ふせした, 添えた	緇欄されたる又ふ せしてある
----------------	---------------------------	---------------------------	-----------	-------------------

Fuxe. フセ(ふせ) つぎあて ¶ Fuxeuo suru.(ふせをする)つぎをあてる.

上(Cami)では Tçuguiuo suru.(継ぎをする)

(1603『日葡辞書』)

15 ほしめかす 10/43	Aangehitst dw aanhitzen	Hosimekasita	ほしめかした	挑発(オダテ)ら れたる
-------------------	----------------------------	---------------------	--------	-----------------

Foximecaxi,su,aita. ホシメカシ, ス, イタ(ほしめかし, す, いた)

犬をけしかける 下(X)の語. 上(Cami)では Qexicaquru(喉くる)と言う. 例.

Inuuo Foximecasu.(犬をほしめかす)

(1603『日葡辞書』)

16 ほそい 83/3	Akkertje Zg	Hosoki Hatake	細き畑	小き畑
----------------	-------------	----------------------	-----	-----

Fosoi. ホソイ(細い) 糸などのように細くて長い(もの).

Fososa.(細さ) Fosô.(細う)

(1603『日葡辞書』)

一小さいことを ほそかた 又細い 又こまい

(1841頃『壺蘆園雜記』)

小き 長崎にて こまい 又こまか 又ほそいとも

ふとい こまい ほそいのいもじも云によりては

かもじにかへて ふとかもの こまかもの ほそかもの

など云

(1830頃『筑紫方言』)

17 ゆびがね 59/15	Zy gebruikte veel List om hem Zyn Ring afhandig te maaken	Anoonagoga Anofito no Jubi gane wo tortameni ookf no hakari goto wo motsiita	あの女子があの人 の <u>指金</u> を取るため に多くの謀を用い た	彼が <u>指輪</u> を手離し さするとて彼女が 多くの謀を用た
------------------	--------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------	------------------------------------------

† Yubigane. ユビガネ(指金・環) 指輪.

(1603『日葡辞書』)

一 ^{アネイル}
指金 (南詞雑解)

(参考) タガイニ ユビガネヲ トリカワイタ

(1593『天草版伊曾保物語』)

あこやの珠は松浦殿の平戸にても取る。(中略) 唐人たかくかふ。(中略) 又指
がねにもつくる.

(1675 随筆『遠碧軒記』)

Yubiwa ユビワ 指環

(1867『和英語林集成』初版)

イビガネ 指金. 指輪 琉球語 ibi-gani

(1925『長崎市史風俗編』付録長崎方言集覧)

18 よか 84/31	de Alderbeste	Ittsi Joka	いっち良か	最も善き物
----------------	---------------	------------	-------	-------

ふとい こまい ほそいのいもじも云によりてはかもじにかへて

ふとかもの こまかもの ほそかものなど云 (1830頃『筑紫方言』)

19 よま 91/35	Angelsnoer Zg	tsoeri joma	釣りよま	釣糸
----------------	---------------	-------------	------	----

Yoma. ヨマ(よま) 細い麻紐. 下(X.)の語. (1603『日葡辞書』)

これを通俗硝子よまといふ尤手元は常の芋よま也。是をまた根よまといふ

(1797『長崎歳時記』)

上に示した1～19の語は、ほぼ同時代の方言書に九州方言または長崎方言という記載があること、3稿でいずれも別の語に書き換えられていることから、ドゥーフの周囲の和蘭通詞達に、方言として認識されていたことが確実である。尚「17 ゆびがね」は、1603年『日葡辞書』では中央語であるが、1867年『和英語林集成』では「指輪」と書かれている。これらの参考資料から、当時すでに方言的であったのではないかと考えた。

3-3-2 音韻的長崎方言語集

表2に挙げたのは、3-2で述べた音韻変化の結果、定着した語形である。3-2で取り上げた清濁の交替した「短(み^シ)かく」や「婦(か^イ)ろう」との違いがあいまいな部分もあるが、当時、上記2語は音韻として認識されていたのか音声的な問題なのか確証がない。ここで取り上げるのは、より音韻として特徴がはっきりしていると思われる語である。

表2

通番, 語 頁 / 行	オランダ語	ローマ字日本語	漢字仮名	3稿 『道訳法見馬』
20 あすこ 67/32	Afscheiden die akker is daar afgepaald	Sono Hatake wa asko ni Hasira wo motte hedatetear	その畑はあすこに 柱をもって隔てて ある	其畑は彼所に柵を 建て隔てある
21 なかなわり 49/14	Afdrinken ww een krak keel afdrinken	Sake nite naka nawari Sur	酒にて仲直(な わ)りする	酒にて流す。喧嘩 などを。
22 なづく 32/34	Aantrekkelijk, die ligt iets	Nazoeki Jasoeki	懐(なず)きやす き	物に感じ易き
23 ひちじゅで 28/29	Aansluipen	Fittsi Zioe de kfoer	ひっちじゅで来る	ひそんで来る
24 まっと 6/48	Douw dat wat aan	Sore wo matto ositsoekero	それをまっと押し 付けろ	夫を少し押付よ
25 すたむる 58/20	Afgieten	oewazumi wo soetamoer	上澄をすたむる	しためる 上ハ澄 みなどを
26 なわす 47/49	Afbrengen, uit de gewoonte brengen	Kfoese wo nawas	癖を直(なわ)す	癖を直す

3-3-3 上記以外で現代の方言辞典にある長崎方言語彙

以下は3-3-1, 3-3-2には該当しないものの、現代の『長崎県方言辞典』に掲載されている語である(表3)。方言はかつて中央語だったものも多いので、現代は方言であっても近世当時
に方言だとは限らない。例えば、29「くちなわ」は以下に示すように中古には蛇という意味で
使われていたことが明らかであり、また35「そざす」は、日葡辞書で中央語として掲載されて
いる。

・ある時には、くちなは、とかげに吞まれんとす (『宇津保物語』春日詣)

・† Sozaxi, su, aita. ソザシ, ス, イタ(そざし, す, いた) Sonzasu (損ざす) に同じ. 物を損
じいためる、または、紐末に取り扱う。▶Sonzaxi, su (『邦訳日葡辞書』)

また、28「がと」は助詞ガが派生してできた語で、程度や分量を表し、「程」「分」と訳でき

表3

通番, 語 頁 / 行	オランダ語	ローマ字日本語	漢字仮名	3 稿 『道訳法児馬』
27 えぬ 69/48	Hy kan van Zyn Vrouw niet afscheiden	Anofito wa Ziboen no Jomego Hanarewayenoe	あの人は自分の嫁 子離れわえぬ	彼は己か妻より引 離得ぬであつた
28 がと 2/21	Myn buurman heeft voor 1000 Gulden aan oud Porcelain	Watakfoesi no Kinziyo no fito ga moekasi no Jakimono wo 1000 gulden ga to motte or	わたくしの近所の 人が昔の焼き物 を1000guldenがと 持っておる	我隣の人が千ギユ ルテン程の昔の陶 器を持ておる
29 くちなわ 63/2	De slang kroop den berg af	kfoetsi nawa ga Jama Jori Hai kfoedatta	くちなわが山より 這い下った	蛇が山より這い下 た
30 くやす 47/21	Afbreken ww	Oetsi Kfoejas	打ちくやす	打崩す
31 こがる 2/28	dat Vleesch bakt aan	Kono nikfoe wa Kogaretsoekf	この肉はこがれつ く	焦れ付く
32 さま 43/89	Achteruit byw achterwaards	Atoje, Ato samaje	あとへ、あとさま へ	後さまへ
33 すざる 52/17	Afgedeinst dw afdeinzen	Soezatta	すざった	部分ケされたる
34 すゆい 99/4	Azynagtig toev: azynig	Soekosi, soejui	酢ゆい	酢のよふなる
35 そざす 65/11	Aflopen, ww door loopen	Haki Sozas	履きそざす	履き損す
36 ばはん 42/33	Achteromhaalen, Sluiken	Bahansur	八幡(ばはん)す る	密売する
37 へぐ 70/38	Afschilferen Gw met schilfers afvallen	hegete otsoer	へげて落つる	へげ落る
38 みな 85/22	Alikruik Zv	mina gai	蜷貝(みながい)	蜷二ナ

る。各地にバリエーションが見られることから、ガの古い用法の残存とみることができる。

これらはいずれも古典に用例を見る事が出来る。古くは中央語だったこれらの語は、3稿ではすべて当時の中央語に書き換えられていることから、ドゥーフの頃にはすでに古い語形か、あるいは地方にしか残らない方言と認識されていたか、その間で揺れていた可能性が大いにある。このことから、これらの語は方言化途上の段階にあると考えた。

3-3-4 方言の可能性があるが、記述が見つからなかった語彙

表4は、方言の可能性のあるものの、それを明らかにできなかった例である。例えば「石火矢」は篠崎久躬（1997）では『唐話纂要』『長崎歳時記』『南詞雑解』などに記載のある「方言」として取り上げてあるが、今回の調査ではいずれも同書に方言としての記述を見つけることができなかった。また、40「かけにとった」は、オランダ語の部分を読すると「隠された」となるが、それに合致する語を発見できていない。さらに、松田（1984②）において、42「算用まい」と表記されている「Sanjoo mai」は、オランダ語の意味と、3稿での訳が「値段付け」であることから「算用前」かと想像できるが、確かな証拠を見つけることができなかった。今後の課題としたい。

表4

通番, 語 頁 / 行	オランダ語	ローマ字日本語	漢字仮名	3稿 『道訳法見馬』
39 いしびや 96/51	Artillery Zv Geschut	Isibi ja nado	石火矢など	石火矢に拘る具
40 かけ 52/5	Afgeborgen dw afborgen	Kake ni totta	かけに取った	(記述なし)
41 算用まい 12/38	Aangerekend dw aanrekenen	Sanjoo mai ni sita, toga wo owaseta	算用まいにした、 咎(とが)を負わ せた	値段付してやられ たる

3-3-5 俗語と思われる語彙

表5は、当時広い地域で使用された俗語や、擬態語、造語ではないかと思われる「総世界」のような臨時的な用法である。43「いっち」は「一」を強めて言った語で、「最も」という意味で使われる。『日本国語大辞典第二版』によると15世紀頃から抄物に見られる口語のようである。方言辞典にも掲載されるが、広く全国に散見されることから、ここでは俗語とした。また、44「喉のぐりぐり」は「喉仏」を意味する。「結吭」は発音が類似した「結喉」が『解体新書』（1774）の（巻四・四ウ）にあるのとはほぼ同様の語であろう。初稿では日常のわかりやすい口語として擬態語が採用されたのではないだろうか。本書の凡例に「直に鄙俚の俗語方言を以て訳す」とあったのは、こういう言葉を指すと思われる。

表6

通番, 語 頁 / 行	オランダ語	ローマ字日本語	漢字仮名	3 稿 『道訳法児馬』	3 稿での 変更
45 あくる 5/13	Aanbreeken Gw dit word van den dag gezegt	Jo no akfoer	夜の明くる	夜の明る	段不明
46 ぬいつくる 20/7	Aanlassen, Aannaayen	Noei tsoekfoer	縫い付くる	縫付る	段不明
47 はかどらす 7/32	Aandryven, voortzetten, bevorderen	Hakadorasur	はかどらす	捗取らせる	一段
48 きらわする 71/11	Afschrikken ww afkeerig maaken	Kirawasur	嫌わする	嫌ふよふにする	別表現

3-4-2 形容詞ウ音便形

形容詞連用形ウ音便は4例見られたが、3稿ではそのうち3例が「多く」のように原形クと表記され、1例は別の語に置換えられていた。

表7

通番, 語 頁 / 行	オランダ語	ローマ字日本語	漢字仮名	3 稿 『道訳法児馬』	3 稿での 変更
49 多う 87/46	Alte veel praats hebben	Amari oo mono juu	余り多う物を 言う	余り多くもの をいふ	原形
50 よう 12/3	Dit is niet aan genaam te hoorem	Sore wa kikf ni Kakotsi Joo nai	それは聞くに 心地ようない	それは聞に心 地よからず	別語

3-4-3 動詞音便形（ハ四ウ音便・マ四ウ音便・カ四イ音便）

ハ行及びマ行四段動詞のウ音便形は西日本方言の特徴である。初稿には14例見られた。3稿では「見舞た」「掛り合て」というようにミマイタ、ミマツタ、ミモータなど複数の読み方を許す表記がなされていたり、原形なのか音便形なのか明らかなでない表記や、別語で言い換えられた語形があったりして、ウ音便形と確定できるものは1例も見られなかった。また、カ行四段

表8

通番, 語 頁 / 行	オランダ語	ローマ字日本語	漢字仮名	3 稿 『道訳法児馬』	3 稿での 変更
51 おそうた 13/39	Aangetast dw aantasten	osoota	襲うた	仕かけられた る	別語
52 こうた 10/22	Aangefokt dw Aanfokken	Sodateta, Koota	育てた, 飼うた	殖されたる	別語
53 ようだ 51/16	Het Huwelyk ging weer af	Jengfumi ga Jooda	縁組みが ようだ	其縁組は復止 めになった	別語
54 ゆいた 85/5	Aleer hy na de kerk ging	anofito ga tera ni Juita maje ni	あの方が寺に 行いた前に	彼か寺に行く 前に	別語

動詞は中央語で一般的にイ音便形で使われるが、「行きて」に限ってはイ音便化しない。ところが初稿にはイ音便のユイテが4例も見られ、方言的な例として興味深かった。

3-4-4 動詞命令形「ロ」

現代長崎方言の動詞命令形語尾は、一般的にロである。初稿でもロが4例見つかったが、3稿ではそのうち3例がヨとなり、1例は命令形でない別語に置き換わっていた。以下例示する。

表9

通番、語 頁 / 行	オランダ語	ローマ字日本語	漢字仮名	3稿 『道訳法見馬』	3稿での 変更
55 せろ 4/42	#Maak dat ter degen schoon daar moet	Sore wo nen irete Soozi sero sore ni gomokf no tsoeite oranoë Jooni	それを念いれ て掃除 せろ それに芥（ご もく）ついて おらぬように	夫レを念を入 て掃除 せよ	ヨ
56 おしつけろ 6/48	Douw dat wat aan	Sore wo matto ositsoekero	それをまっと 押し付けろ	少し 押付よ	ヨ

3-4-5 その他

上記の他に長崎方言の特徴的な語形として、～カス型の語、～オル、～トル、主格助詞ノ、形容詞連用形にシテが接続する例を収集した。カス型「転ばかす」は『日本方言大辞典』に掲載され、シテは「少なうして」という表現が見られた。～オル、～トルも含めて、いずれも3稿では別の表現に変更されていた。

4 初稿と3稿のことばの比較

以上、『ドゥーフ・ハルマ』初稿A項目を通覧したところ、音韻、語彙、文法ともに数多くの長崎方言の特徴を持つ語が見つかった。しかも細かい発音がローマ字で書き分けられていることから、方言資料としての価値が高いことも明らかとなった。長崎方言の特徴を有する語を、音韻、語彙、音便、用言に分けて述べたことを一覧表にすると表10の通りになる。なお、例数が少なかったので本文で言及しなかったが、助詞についても表に示した。

表中、「初稿A出現数」とは、初稿のA項目中に現れた方言の延べ語数である。表を一瞥して分かるように、「変更なし」の語は非常に数が少なく初稿に現れた長崎方言は3稿では多くが書き換えられている。変更の状況についてまとめると、おおよそ以下の通りである。

- 1 ローマ字が仮名に変わった時点で、音訛はほとんど分からなくなった。
- 2 語彙と助詞はほとんどが「中央語」に置換されていた。
- 3 音便は3稿では活用語尾の表記が省略されて、音便形か原形かが不明な物が多い。
- 4 用言も活用語尾の送り仮名を省略して二段にも一段にも読めるような表記（「表記省略」）がなされることが多い。また、言い回し自体が変更され「別表現」になっているものも見られた。

表10 初稿と3稿の表記比較

※ 数字は用例数, *一段活用は参考データ

	方言形	初稿 A 出現数	3 稿での表記						初稿の用例
			変更なし	表記省略	中央語	別表現	文語	記載無	
音韻	母音交替	10		6		4			Kairoo (かいろう:婦), Itsizijuroesiki (いちじゅる しき:著)
	清濁交替	8		8					misikakf(みしかく)
	無声化	多数		多数					sur(する), otos(落とす)
	連声	8		3		5			Kijawasete(着やわせて)
	合拗音	1		1					gfoewan(願)
	撥音化	1				1			Sin koto(死ぬ事)
語彙	俚言	71	8	1	58			4	kfoebiritsoekfer(くびりつ くる), Sijans(しゃんす)
音便	カ行四段動詞 イ音便	4		4					Juite(行いて)
	ハ行四段動詞 ウ音便	13		4		8		1	Negoota(願うた)
	マ行四段動詞 ウ音便	1				1			Jooda(止うだ)
	形容詞ウ音便	4			3	1			oo(多う)
用言	四段動詞	1		1					tatte(足って)
	* (上一段動 詞・助動詞)	2		2					otsir(落ちる)
	上二段動詞・ 助動詞	9	2	5		1		1	Oroer(下るる)
	* (下一段動 詞・助動詞)	3	2			1			Soeter(捨てる)
	下二段動詞・ 助動詞	163	27	46	12	67	2	9	Akfoer(明くる)
	カス型動詞	4	1	1		2			Korobakas(転ばかす)
	～とる	2		2					nattor(成っとる)
	～おる	20	1	14		3		2	Hanarete or(離れておる)
	命令形口	4			3	1			Soozi sero(掃除せろ)
	形容詞カ語尾	4			4				joka(良か)
助詞	シ入れ (少の うして)	1			1				soekf noosite(少なうして)
	助詞ノ	2				2			Tsikara no Otorojete or (力の衰えておる)
	助詞ニノ ^{注9}	2			2				Fito bito ni no iwatasi (人々にの言渡し)

これらのことから、初稿はローマ字表記であるがゆえに、音訛やウ音便形、二段活用形などの方言形が特定できたことが分かった。また初稿は語彙や助詞においても方言形が多く含まれていることも明らかとなった。

『ドゥーフ・ハルマ』は現存する3稿の「緒言」に「此書の訳語は直に長崎の方言を取る」と記述されているため、従来長崎方言語彙に言及する先行研究もあった^{注10}が、いずれの研究でも一部の方言語彙を指摘するにとどまっていた。しかし今回、改めて初稿の言葉を調査したことで、3稿との差異が明らかとなった。それはとりまなおさず、私的に編纂したローマ字綴りの初稿と、幕府献上本たる漢字仮名交じり文の3稿の編纂目的の差によると考えられるが、方言語彙が豊富に含まれ、発音や文法などの面でもその実態が細かく反映されている初稿の資料的価値が浮き彫りとなった。

おわりに

今回はひとまず初稿のA項目の長崎方言について記述し、方言資料としての可能性について述べた。今後はA項目以外の翻刻を進めて資料の整備をするとともに、同時期の他の方言資料と照合しながら更に詳しく分析し、従来分からなかった近世後期の長崎方言の実態を明らかにしていきたい。

注

- 1 1817年成立の日蘭辞書でオランダ語と漢字仮名表記の日本語訳と例文を載せる。別名『道訳法児馬』または『長崎ハルマ』ともいう。なお、H. Doeffはドゥーフ、ゾーフ、ズーフと表記されることがある。
- 2 松田清（1984①、②）参照。後の発見も含め12巻現存（総数約1,300ページ）。
- 3 同書が高知市内で見つかった理由は不明である。松田氏は、筆跡や使用されている用紙、諸本との内容的照合など、書誌学的な面から周到な調査を経て、ヘンドリック・ドゥーフの自筆本で『ドゥーフ・ハルマ』の初稿本と認定された。松田（1984①、②、1991）参照。
- 4 早稲田大学蔵『道訳法児馬』。坪井信道（写）、書写年不明、8冊、縦28cm。請求番号ホ10-01749。
- 5 福澤諭吉『福翁自伝』には「ゾーフ部屋という字引のある部屋に、五人も十人も群をなして無言で字引を引きつつ勉強している。」様子が描かれている。
- 6 斉藤阿具（2005）による。
- 7 松田清（1984①、②）、松田（1991）
- 8 2稿はオランダに帰国する直前までドゥーフが校訂したもの。3稿はドゥーフ帰国後に和蘭通詞たちが更に手を入れ1834年に完成したもので、これが写本として世に広まった。詳細は松田（1991）参照。
- 9 長崎方言で当時ニノという形があったのか、ドゥーフの個人的な誤りなのかは未詳であるが、二回出現していることから念のため挙げた。今後の調査に俟たい。
- 10 杉本つとむ（1978）、鈴木博（1977、1981）、坂梨隆三（1993）。坂梨氏の東大本のご研究では方言語彙の指摘が多いが、それでも初稿よりかなり少ないようである。

【参考文献】

越谷吾山（1775）『物類称呼』／司馬江漢（1788）『西遊旅譚』／（1790）『南詞雜解』（長崎歴史文化博物館蔵）／中岡益（1814）『瓊浦通』（長崎歴史文化博物館福田文庫蔵）／（1830頃）『筑紫方言』（九州大学附属図書館蔵）／（1841）『壹箇圃雜記』（国立国会図書館蔵）／古賀十二郎（1966）『長崎洋学史上巻』長崎文献社／鈴木博（1973）『ライデンかいまみの記』『滋賀大國文』11／鈴木博（1975）『洋学辞書二題』

『滋賀大國文』13／鈴木博(1977)「ライデン本『蘭日辞書』の日本語―「かじょ」(彼女)など―」『滋賀大國文』15／鈴木博(1981)「ゾーフハルマの長崎言葉」『藤原与一先生古稀記念論集『方言学論叢』Ⅱ―方言研究の射程』三省堂／杉本つとむ(1978)『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅲ』早稲田大学出版部／松田清(1984①)「新発見『ドゥーフ・ハルマ』初稿本について」『日本古書通信』661号／松田清(1984②)「『ドゥーフ・ハルマ』初稿の翻刻ならびに『和蘭字彙』ハルマ『蘭仏辞典』との訳語対照Ⅰ」『高知大学仏文研究室紀要 南海手帖』2／松田清(1986)「『ドゥーフ・ハルマ』初稿の翻刻ならびに『和蘭字彙』ハルマ『蘭仏辞典』との訳語対照Ⅱ」『高知大学仏文研究室紀要 南海手帖』3／松田清(1991)「絵から言葉へ」『日中実学史研究』思文閣／『道訳法児馬』早稲田大学図書館蔵本 (https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ho10/ho10_01749/)／坂梨隆三(1993①)「『ゾーフハルマ』の九州方言」『鶴久教授退官記念国語学論集』桜楓社／坂梨隆三(1993②)「『ゾーフハルマ』の方言」『松村明先生喜寿記念国語研究』明治書院／坂梨隆三(1993③)「『ゾーフハルマ』の方言など」『東京大学教養学部人文科学科紀要』97輯／原田章之進編(1993)『長崎県方言辞典』風間書房／土井忠生ほか(1995)『邦訳日葡辞書』岩波書店／篠崎久躬(1997)『長崎方言の歴史的研究』長崎文献社／中野幸一(1999)『新編日本古典文学全集14 宇津保物語』小学館／(2002)『日本国語大辞典第二版』小学館／斎藤阿具(2005)『ゾーフ日本回想録・フィッセル参府紀行』丸善雄松堂

※本研究は「科学研究費(基盤(c)17K02781)」および、「2021年度長崎大学多文化社会学部研究シーズ育成事業(代表:トート・ルディ 分担者:前田桂子, 原田走一郎)」の助成を受けています。

※本資料の撮影と利用の了承を頂きました成城大学の陳力衛先生と、画像提供をいただいた高知県立高知追手前高等学校および高知県立坂本龍馬記念館に深く感謝いたします。

(長崎大学人文社会科学域 まえだ けいこ)